学位研究　第4号　　平成8年3月　　（論文）
〔学位授与機構研究紀要〕

学位授与機構学士取得者に関する予備調査結果

A Follow up Survey on the NIAD Bachelors

森　　利　　枝
Rie MORI

Research in Academic Degrees, No. 4 (March, 1996) 〔the article〕
The Journal of National Institution for Academic Degrees

学位授与機構学士取得者に関する予備調査結果

森　利　枝*

はじめに

学位授与機構では，学校教育法第68条の２第３項にもとづき，学士・修士・博士の各学位を授与している。これらのうち学士の学位授与については，①短期大学・高等専門学校卒業者等で，大学等における一定の単位の修得と，学習成果の審査・試験によって大学卒と同等以上の学力をもつと認められる者に対する授与（クレジットベース），②学校教育法外の法律にもとづいて設置されている教育施設，いわゆる省庁大学校で，大学に相当する教育を行うと学位授与機構が認定した課程を修了した者に対する授与（プログラムベース）に大別できる。この小論でとりあげるのは，①に挙げたクレジットベースの申請者についての調査結果である。

学位授与機構は平成３年７月に設立された。①の制度による最初の学位の申請者は平成４年10月の５名であったが，その後の増加を経て平成７年度４月期までの累計で727名からの申請を受け，うち594名に学位の学士を授与してきた。学位授与機構ではこれらの学位取得者全員に対して，学位取得に関する簡単なアンケート調査を実施している。これは学位授与機構における調査研究と，業務の円滑化に資することを目的としており，今後行うべき総合的な調査のための予備的調査として位置づけられている。ここでは，これまでに回答を得た平成６年10月期申請分までの調査結果をまとめて報告する。

Ⅰ　制度のしくみと授与者の属性

1　申請

学位の申請は年に二回，４月と10月の一定期間に受け付けられている。申請者は以下の三種類の条件のうちの一を満たして，学位の申請のための基礎資格を有するものとされる。

〔1〕修業年限２年の短期大学を卒業した者・高等専門学校を卒業した者[1)]

〔2〕修業年限３年の短期大学を卒業した者[2)]

〔3〕大学に２年以上在学し62単位以上を修得した者

[1)]外国において学校教育における14年の課程を修了した者を含む。

[2)]旧国立工業教員養成所を卒業した者，旧国立養護教員養成所を卒業した者および外国において学校教育における15年の課程を修了した者を含む。

---

*学位授与機構審査研究部助手

申請者は，前記の基礎資格を満たしたのちにさらに学修を行い単位を積み上げて申請に至る。基礎資格該当後から申請までにに求められる学修年限と単位数は，それぞれ以下のように定められている。

1．2年以上にわたり62単位以上

2．1年以上にわたり31単位以上

3．〔3〕の大学に在学した期間および修得した単位を含めて4年以上にわたり124単位

学位授与機構が授与する学士の学位は，表1に示す26の「専攻分野」にわたることが定められている。

表1　学位授与機構が授与する学士の専攻分野

文　学	薬　学
教育学	看護学
神　学	保健衛生学
社会学	鍼灸学
教　養	栄養学
学　芸	工　学
社会科学	芸術工学
法　学	商船学
政治学	農　学
経済学	水産学
商　学	家政学
経営学	芸術学
理　学	体育学

これらの専攻分野のうち一部の専攻分野では修得単位の審査をさらに下位の「専攻の区分」で行っている。表2は，今回調査の集計を行った平成6年10月の申請期までに修得単位の審査の基準が策定されている21分野について，専攻の区分の設定状況を示したものである。今回の分析は，これまでに申請のなされた分野を対象にした。

さて，基礎資格該当後の学修では，大学における科目等履修等による単位修得が求められるが，大学以外の単位の修得先としては学位授与機構が認定した短期大学・高等専門学校の専攻科がある。いずれの場合でも大学の単位16単位以上が含まれていなければならない。

また，次の①から③のうちいずれかの専攻科を当該年度3月に終了する見込みの者で，かつ修得単位に関する審査の基準を満たす見込みの者は，当該年度の10月期に学士の学位を申請することができる。

①修業年限2年の短期大学に置かれた修業年限2年の専攻科

②修業年限3年の短期大学（短期大学設置基準（昭和50年文部省令第21号）第19条に規定する短期大学を除く。）に置かれた修業年限1年の専攻科

③高等専門学校に置かれた修業年限2年の専攻科

このような見込み申請者は，6年10月期までの申請者の累計569名中約63パーセントの359名であ

り，うち312名に学士の学位が授与されている。

表2　学士の学位における専攻分野と専攻区分

専攻分野	専攻の区分	専攻分野	専攻の区分
文学	国語国文学	理学	数学・情報系
	英語・英米文学		物理学・地学系
	独語・独文学		化学系
	仏語・仏文学		生物学系
	歴史学		総合理学
	哲学	看護学	看護学
	心理学	保健衛生学	検査技術科学
	宗教学		放射線技術科学
教育学	教育学		理学療法学
神学	神学		作業療法学
社会学	社会学	栄養学	栄養学
	社会福祉学	工学	機械工学
教養学芸	比較文化		電気電子工学
	地域研究		情報工学
	国際関係		応用化学
	科学技術研究		材料工学
社会科学	社会科学		土木工学
法学	法学		建築学
政治学	政治学	農学	農学
経済学	経済学	家政学	家政学
商学	商学	芸術学	音楽
経営学	経営学		美術
		体育学	体育学

2　授与者

表3・4は，平成4年10月期より6年10月期までの申請者と学位取得者（本論中では授与者と呼ぶ）数の専攻分野別一覧である。カッコ内の数字は短期大学ないし高等専門学校の専攻科に在学するもので，見込み申請を行ったものの人数（内数）を示す。

学位授与の可否を決めるための審査は次のように行われる。

申請者は必要な単位を修得したうえで単位修得を証明する書類を学位授与機構に提出する。さらに同時に学修成果を提出する。

学修成果は，原則としてレポートの形式で提出される。レポートは12,000字から20,000字の日本語で作成することが求められている（ただし専攻分野「理学」では8,000字から20,000字）。なお専攻分野「芸術学」では美術作品の写真，音楽の演奏等を撮影したビデオテープ，美術作品としてのビデオテープを，レポートに替わる学修成果として申請時に提出することができる。

試験は提出された学習成果の内容に基づいて行われる。レポート提出者に対しては小論文試験が行われ，芸術学でレポート以外を提出した者には面接試験が行われる。レポートを提出して筆記試験を受けたものに対する面接試験は行われない。

ここではまず，これまでの学士の学位取得者のプロフィールについて若干の分析を試みる。

表3　申請者数

申請期	4.10	5.04	5.10	6.04	6.10	計
文　学			1		(9) 10	(9) 11
教育学			1	1	2	4
社会学				1		1
教　養		1			1	2
学　芸				1		1
社会科学					1	1
法　学	4				1	5
経済学		1	1	1		3
経営学			1		2	3
商　学	1				(7) 7	(7) 8
理　学			1	3	2	6
看護学		30	(10) 15	35	(11) 33	(21) 113
保健衛生学			4	15	26	45
栄養学					(4) 4	(4) 4
工　学			(47) 49	3	(121) 128	(168) 180
家政学					(2) 2	(2) 2
芸術学		1	(33) 44	9	(115) 126	(148) 180
計	5	33	(90) 117	69	(269) 345	(359) 569

表4　授与者数

申請期	4.10	5.04	5.10	6.04	6.10	計
文　学			1		(5) 5	(5) 6
教育学			1	1	1	3
社会学				1		1
教　養		1			0	1
学　芸				1		1
社会科学					0	0
法　学	2				1	3
経済学		0	1	0		1
経営学			1		1	2
商　学	1				(6) 6	(6) 7
理　学			1	3	1	5
看護学		13	(6) 8	20	(8) 19	(14) 60
保健衛生学			4	13	26	43
栄養学					(4) 4	(4) 4
工　学			(44) 46	3	(116) 123	(160) 172
家政学					0	0
芸術学		1	(28) 38	9	(95) 105	(123) 153
計	3	15	(78) 101	51	(234) 292	(312) 462

（カッコ内は認定専攻科修了見込み者等で，内数である）

まず授与者の男女比は，図1に示すように全授与者462名中男性215名女性247名とほぼ同率である。年齢別にみると多くの専攻科在籍者が修了年を迎える22歳が258名と最大の年齢集団を形成している。このために授与者の平均年齢は24.04歳と若いが，図2にみられるように年齢の広がりは21歳から51歳までと広い。また授与者の本籍地は，国内の47都道府県すべてにわたっている。また外国籍を持つ者についても，大韓民国の1名，ドイツ連邦共和国の1名に，それぞれ学士（工学）と学士（芸術学）の学位が授与されている。

さらに，これら授与者を，先に「申請」の項で述べた学位申請のための基礎資格別にみると次のような数字が得られる。

基礎資格1．修業年限2年の短期大学を卒業した者・高等専門学校を卒業した者　332名

基礎資格2．修業年限3年の短期大学を卒業した者　91名

基礎資格3．大学に2年以上在学し62単位以上を修得した者　39名

これをさらに細かく分析すると，以下のようになる。

基礎資格1のうち

修業年限2年の短期大学を卒業した者　169名

高等専門学校を卒業した者　163名

基礎資格２のうち

看護系短期大学を卒業した者　60名

保健衛生系短期大学を卒業した者　31名

基礎資格３のうち

大学を中途退学した者　20名（うち学部飛び級で大学院に進学した者６名）

大学を卒業後さらに単位を取得した者　19名

この結果をグラフに表したものが図３である。内側の円が基礎資格の別，外側の円が基礎資格を得た学校の別を表わしている。

以上，平成６年10月期までに申請を行い学士の学位を得た462名について大まかな分析を行った。次いでアンケートに対する回答の分析に移る。

図１　授与者男女比

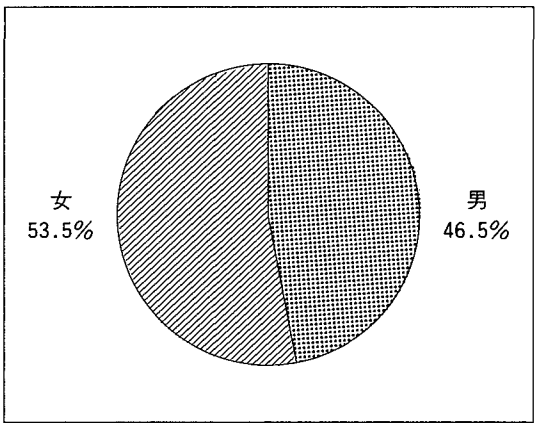


図２　授与者年齢別構成

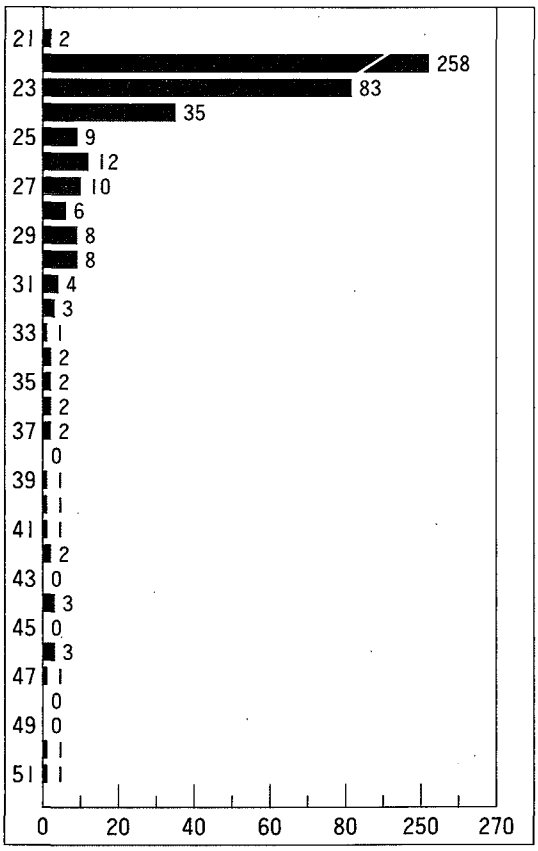
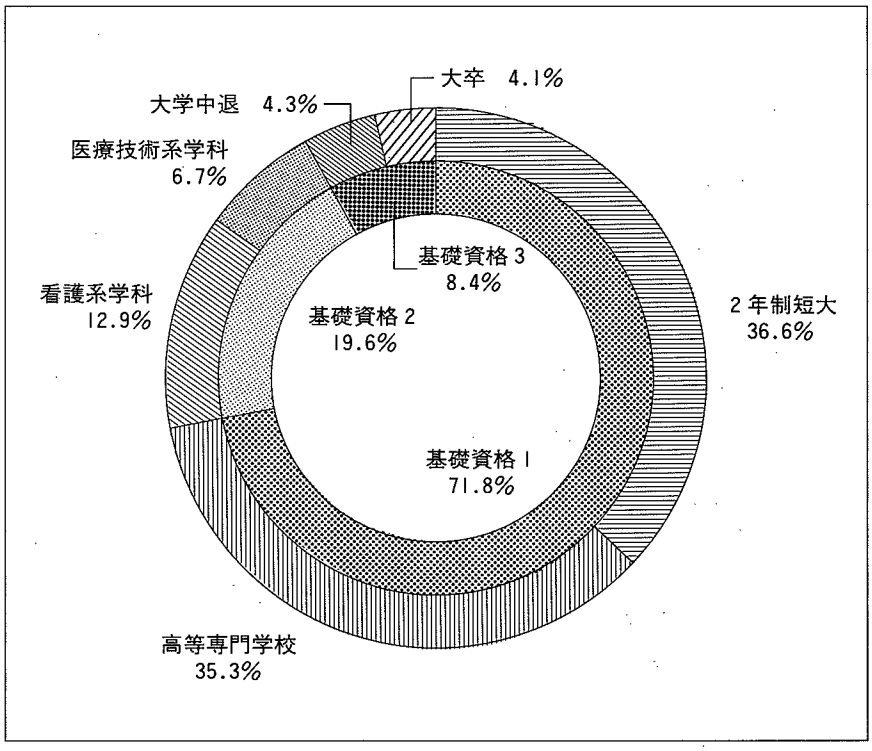


図３　基礎資格別構成



Ⅱ　調査結果

１　調査の実施

学士の学位を授与された者に対するアンケートは，郵送により実施されている。学位を取得した者には本人あてに学位記を郵送している。調査に際しては原則として，この学位記に同封したアンケート用紙を，学位記の受領証を機構あてに返送する際に同送するよう依頼している。これまでの集計では，平成４年10月期から６年10月期までに申請を行い学士の学位を授与されたのべ462名のうち，380名から回答を得ている（回収率82.3%）。このうち５年10月期に申請を行い経営学の学位を授与された１名は，６年４月期に工学の学位を申請し同様に授与されている。この集計では調査直前の工学の学位を取得した者の回答として算入した。

ただし，この間の申請の回数５回に対して，アンケートの実施は２回である。第１回の調査期間は平成６年９月中旬から10月下旬までで，４年10月期から６年４月期までに申請を行い学位を授与された者のべ170名を対象にした。第２回の調査期間は平成７年３月下旬から４月上旬までで，このときは６年10月期に申請して学位を得た者のみを対象とした。したがって，第１回の調査では，調査対象によって学位授与から調査までに２年半近くの期間がある者から学位授与直後の者まで，調査のタイミングに差が生じている。第２回の調査は授与直後に行われた。

次に掲げるように，アンケートの質問のなかには取得した学位の効果を問う項目があるが，取得直後の回答者と取得後一定の期間をおいた回答者とではこの点に相違が生じると考えられる。

2回にわたり実施されたアンケートに回答したものを申請期別に分類すると次のようになる（カッコ内は回収率）。

第1回（平成6年9・10月実施）……平成4年10月　2名（66.6%）
5年4月　12名（80.0%）
5年10月　75名（74.3%）
6年4月　46名（90.2%）
第2回（平成7年3・4月実施）……平成6年10月245名（83.9%）

各期・各専門分野ごとの回答者の内訳は表5に示した。以下の報告は，これら380名の学位取得者に対するアンケート結果の分析である。

表5　回答者数

専攻分野＼申請期	4.10	5.04	5.10	6.04	6.10	計
文　学			1		5	6
教育学			1	1	1	3
社会学				1		1
教養		1			0	1
学芸				1		1
法　学	1				1	2
経済学		0	1	0		1
経営学			0		1	1
商　学	1				6	7
理　学			1	3	0	4
栄養学					3	3
看護学		10	7	19	16	52
保健衛生学			4	11	24	39
工　学			33	2	101	136
芸術学		1	27	8	87	123
計	2	12	75	46	245	380

アンケートは，学位取得に関する6項目の問いと，学位授与機構の業務に関連する「参考」の問い2件からなっている。その書式は資料1に示した通りである。質問内容は下記に一括して掲げた。

以下，学士の学位取得について，アンケートの質問項目に沿って回答の分析を行う。なお，このアンケートの回答中，明らかに回答者の誤認に基づくと思われる矛盾が発生した場合には，集計の際に適宜修正を加えている。

アンケートの質問内容

問1　学位授与機構による学士の学位授与制度をどこで知りましたか。(選択肢・複数回答)

問2－1　学士の学位を取得しようとした動機は,次のどれですか。(選択肢・複数回答)

問2－2　特に強い理由を選ぶとしたらそのうちのどれですか（選択肢）

問3　学士の学位授与の申請をされたときの職業は，次のどれですか。(選択肢)

問4　学士の学位取得後の進路は，次のどれですか。(選択肢)

問5－1　学士の学位を取得したことについてあなた自身どの様な感想をお持ちですか。(選択肢)

問5－2　何か具体的に感想がありましたら回答票の所定欄にご記入ください。(自由記述)

問6　学位授与機構の行っている学位授与制度について，どんなことでも結構ですので，回答票の所定欄にご記入ください。(取得した学位が役立っているか，学位を取得したことの効果，など)

1　学位授与機構の学士の学位授与制度をどこで知ったか

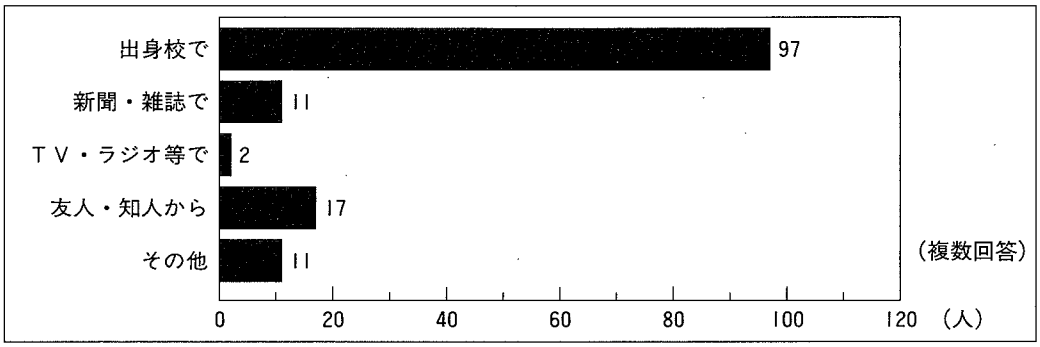
問1では，学位授与機構が行っている学位授与の制度をどのようにして知ったかという，情報へのアクセスの手段をたずねた。その結果が表6である。この情報へのアクセスがもっとも容易に行われると考えられるのは，短期大学・高等専門学校の認定専攻科である。先にも述べたように学位授与機構は，これら専攻科で修得された単位が学士の学位取得に必要な単位に該当することを認定している。したがってこれにあたる各専攻科では，在籍者に学位授与機構による学位授与制度の周知が行われている。このことを反映して，学位授与機構による学位授与制度をどこで知ったかという問いでは，専攻科在籍者（見込み申請者）252名中250名（99.2%）が「出身（在学）校で」と答えている。

表6　情報の経路

	回答数	比率
1　出身（在学）校で	347	91.3%
2　新聞・雑誌等で	12	3.2
3　TV・ラジオ等で	3	0.8
4　友人・知人から聞いた	20	5.3
5　その他	13	3.4
合　計	395	

見込み申請以外の者，すなわちすでに学校を離れていた申請者がこの制度を知った経路については図4に示した。

図４　情報の経路（見込み以外）



これにみられるように，出身校で情報を得た申請者がもっとも多く，全体の約70パーセントを占めている。次いで友人・知人から（12.3%），新聞，雑誌で（8.0%），テレビ・ラジオ等で（1.4%）となっている。その他（8.0%）の内訳としては，放送大学，文部広報などの名前が挙がっている。

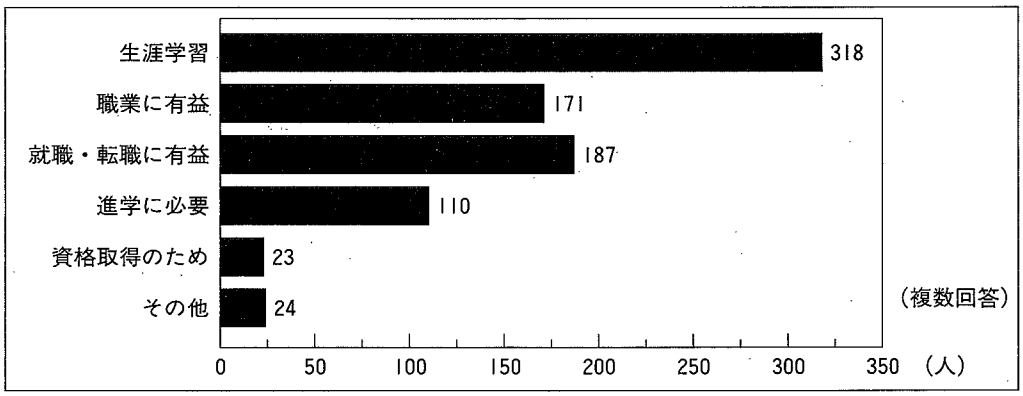
２.学士の学位取得の動機

問２では，申請者が学士の学位を得た，その動機についてたずねた。アンケートの問２－１の複数回答をまとめたものが表７であり，同時に図５に図示した。

表７　学位取得の動機

	動機（複数回答）		特に強い理由	
	回答数	比率	回答数	比率
1　自分に有益（生涯学習）	318	83.7%	181	47.6%
2　自分の仕事にとって有益	171	45.0	44	11.6
3　就職や転職に有益	187	49.2	63	16.6
4　進学に必要	110	28.9	63	16.6
5　資格等取得に必要	23	6.1	8	2.1
6　その他	24	6.3	16	4.2
無回答			5	1.3
合　　計	833		380	

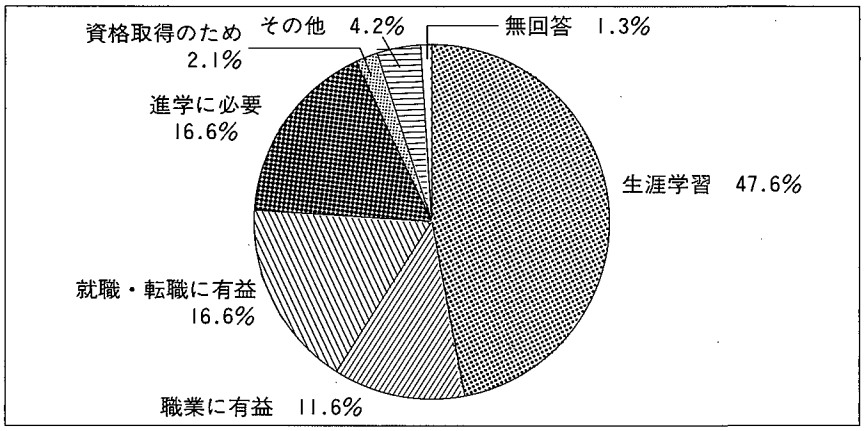
図５　学位取得の動機



ここでは，回答者の83.7パーセントにあたる318名が，「自分に有益と思われたから・生涯学習の一環として」と答えている。ここには，近年の生涯学習に対する意識の高さと，学んだことに学士の学位という形での評価を受けることへの希求が見て取れる。

さらにアンケートでは，学位取得の動機のうち，特に強いものをたずねた。その結果をまとめたものが次に示す図６である。

図６　特に強い動機



ここにみられるように，特に強い動機の中でも「生涯学習」という動機がもっとも大きい割合(47.6%)を占めている。次いで「就職・転職に有益」と「進学に必要」が同率（16.6%）となっている。また「資格取得のため」としたものは，教員免許，建築士，学芸員などの資格を得るために学士の学位を必要としていた。「その他」の動機としては，「教授（教師）の勧め」，「昇級に関係するから」，「(高専卒業後）一度就職して学歴社会を感じたため」，「みんなの意欲につられて」，「専攻科修了の学力を評価してほしかった」ことなどが挙げられている。

この，特に強い動機に関する問いに対する回答を，見込み申請，見込み以外の申請者ごとに分けて分析したものが次に示す図７－１・２である。

図７－１　特に強い動機（見込み）

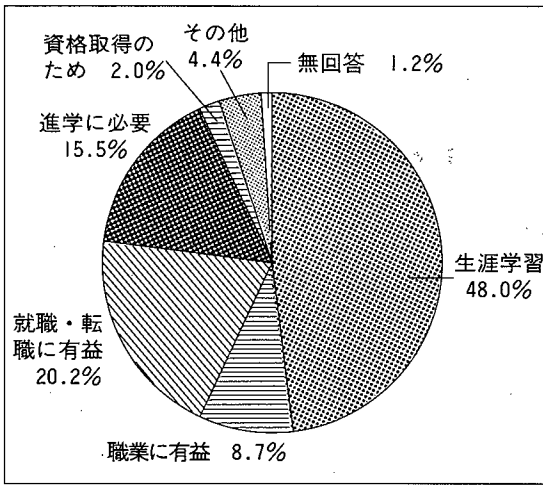
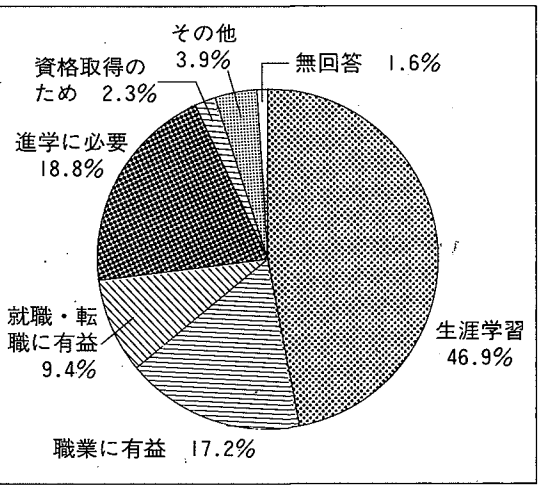


図７－２　特に強い動機（見込み以外）



ここで注目すべきなのは，「進学に必要」という回答の比率が，見込み申請者（15.5%）よりも見込み以外の申請者（18.8%）に大きいという点である。これは次項で述べる申請者の職業ともかかわる点であるが，見込み以外の申請者の約76パーセントがフルタイムの職業をもちながら，進学への意志を持っていることが推察される。実際に「進学に必要」と回答したもののうち66パーセントがフルタイムの職業を持つ社会人であった。

この結果からは，この問いの中でも，見込み申請・見込み申請以外に共通してもっとも高い割合を占めた「生涯学習」という回答の内容を考える際に重要な示唆を得られる。すなわち，学位取得の動機を「生涯学習」とした回答者にとっても，学士の学位取得それ自体が「生涯学習」を意味するのではなく，学士の学位は生涯学習に適した環境を整えるための要素の一つであるととらえられているとも考えられる。したがってここでは，学位取得の動機として「生涯学習」をあげた回答者の中に，潜在的な進学希望者が含まれている可能性も指摘できる。

3　学位授与申請時の職業

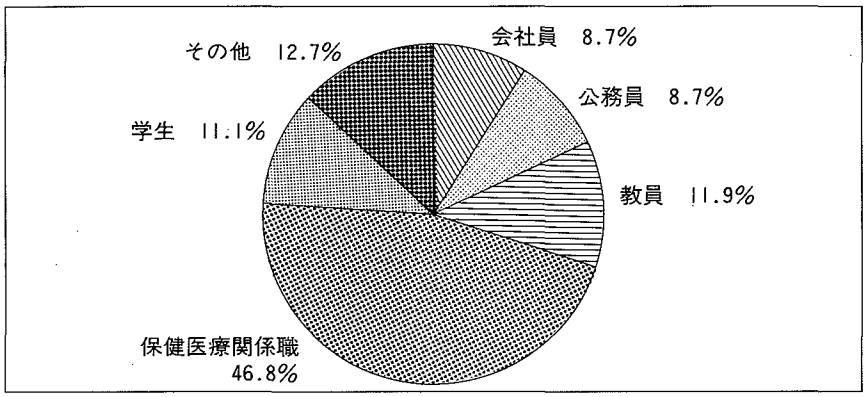
問３では，学位の授与を申請したときの職業をたずねている。この，申請者が学位を申請したときの職業は，申請時に学位授与機構に提出される書類には記載されない。これは，学位審査が申請者の修得した単位と提出された学修成果，小論文ないし面接試験の結果として現れる申請者の学力のみを基準にしてなされ，申請者に関するそれら以外の情報は必要とされていないためである。したがってここに示す職業別構成は，学位取得後のアンケートに回答した者に関してのみ，学位授与機構が把握したデータの集積である。全体の回答の結果は表８に示した。

表８　申請時の職業

	回答数	比　率
1　会社員等	12	3.2%
2　公務員	11	2.9
3　教員	15	3.9
4　保健・医療関係	44	11.6
5　自営業	0	0.0
6　農業等	0	0.0
7　家庭の主婦	0	0.0
8　学生　短大専攻科	144	37.9
高等専攻科	124	32.6
大学院	8	2.1
その他	8	2.1
9　その他	14	3.7
合　計	380	

また，この申請時の職業については，見込み申請以外の申請者に関してのみ集計した結果を図８にグラフで示した。これは見込み申請者がすべて短期大学ないし高等専門学校の専攻科に在学中に学位を申請しており，したがって申請時は学生であったことが明白なためである。

図8　申請時の職業（見込み以外）



前項で述べたように，見込み以外の申請者の約76パーセントは何らかのフルタイムの職業を持っている。なかでも保健医療関係の職業に就いているものは全体の46.8パーセントであり，これは全有職者のうちの約61パーセントに相当する。なお，たとえば国立大学医学部付属病院の看護婦のように，公務員でありかつ医療保健関係の職業に就いているものは，ここでは医療保健関係職に分類している。次いで多いのは教員の11.8パーセント，次いで学生の11.1パーセントである。見込み以外の授与者のなかには大学の学部から飛び級扱いで大学院に入学し，したがって学部を卒業していない（出身大学では学士の学位を得ていない）大学院学生が6名含まれているが，これら大学院学生はこの，学生（11.1%）に分類されている。

さらにこの申請時の職業を専攻分野ごとに分類すると次の表9が得られる。ここで特徴的なのは，会社員・公務員・教員等の職種の申請者の専攻分野が各分野に分散しているのに対して，保健医療関係職についている申請者の専攻分野が理学・看護学・保健衛生学の3分野に収斂している点である。このことからは保健医療関係の職業に就いている授与者が，職能に密接に関連した学修を行い，学位を得る傾向が見て取れる。

表9　申請時の職業・専攻分野別（見込み以外）

	会社員	公務員	教員	保健医療	学生	その他
文学	1					
教育学		1	1			1
社会学						1
教養						1
学芸					1	
法学	1				1	
経済学		1				
商学			1			
経営学	1					
理学				1	3	
看護学		3	1	21	15	
保健衛生学	2	4	11	22		
工学	3	2			4	2
芸術学	2		1		10	9
計	10	11	15	44	34	14

4　学位取得後の進路

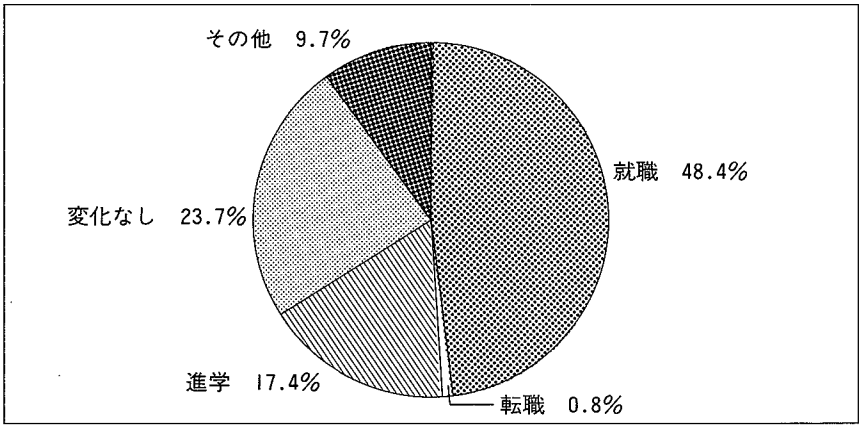
問４では，学位取得後の進路をたずねた。この結果をついてまとめたものが表10である。

表10　学位取得後の進路

	回答数	比　率
1　就職した	184	48.4%
2　転職した	3	0.8
3　進学した	66	17.4
4　変わらない	90	23.7
5　その他	37	9.7
合　　計	380	

さらに表10の内容を図９に図示した。

図９　学位取得後の進路



この図９に見られるように，授与者の半数近く（48.4%）から「就職した」という回答が得られた。次いで「変わらない」と回答したものが23.7パーセント，「進学した」と答えたものが17.4パーセント，「転職した」と回答したもの0.8パーセント，その他9.7パーセントとなっている。「その他」とした回答の具体的な内容としては，「大学院受験準備」，「フリーター・アルバイト」，「フリーの創作活動」などが挙げられている。

そして，この問いに関しても見込み申請者と見込み以外の申請者に分けて集計を行った。その結果は次の図10－１・２に示している。ここで目を引くのは，見込み申請者の半数以上（64.3%）が就職しており，また見込み以外の申請者においては，ほぼ同率（64.8%）で「変化なし」という回答が得られている点である。アンケート回答者中見込み以外の申請者128名について平均年齢を算出すると約32歳という数字が得られるが，先にも述べたように見込み以外の申請者の約76パーセントがフルタイムの職業をもって学位を申請したことと，平均年齢が見込み申請者に比して約10歳高いことが，この学位取得後の進路「変化なし」という回答の割合の高さに影響しているとも考えられる。

図10－1　取得後の進路（見込み）

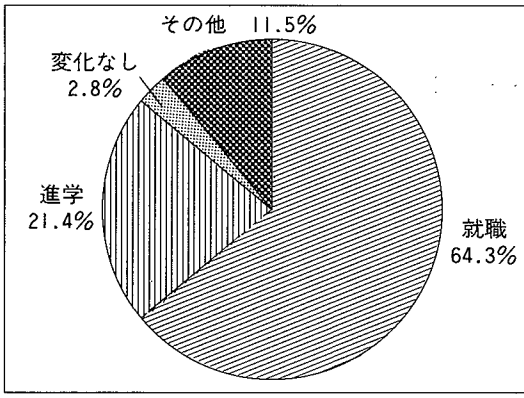
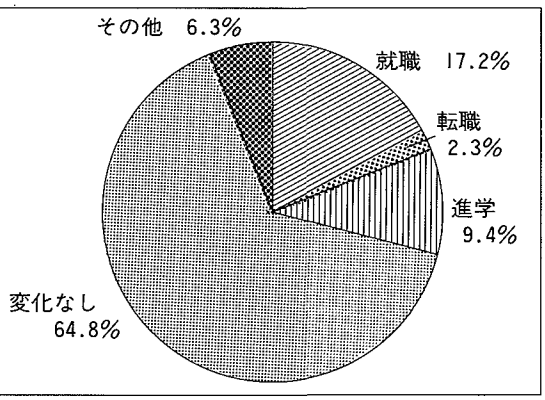


図10－2　取得後の進路（見込み以外）



4－2　取得後の進路と学位取得の関係

では，前項で述べた授与者の進路に，取得した学位は何らかの関係を持っていると考えられているのだろうか。このことについて当事者の主観にしたがって得た回答を，進路の種類ごとに表11にまとめた。

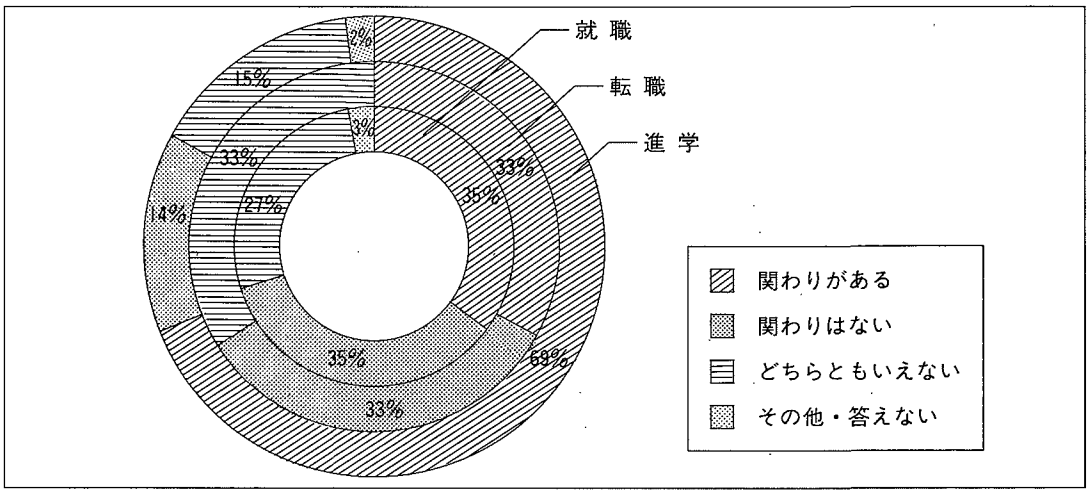
表11　進路と学位の関係

	就　職	比　率	転　職	比　率	進　学	比　率
関わりがある	64	38.4%	1	33.3%	46	69.7%
関わりはない	65	35.3	1	33.3	9	13.6
どちらともいえない	50	27.2	1	33.3	10	15.2
無回答	5	2.7	0		1	1.5
計	184		3		66	

ここでは学位取得後，就職・転職ないし進学といったように進路に何らかの変化が生じたと答えた授与者のみを対象に集計し，「変化なし」「その他」と回答したものについては集計を割愛した。

この結果を同心円グラフで表したものが次の図11である。これらに見られるように，学士の学位

図11　進路と学位の関係



は「進学」という局面で，その重要性をもっとも発揮することが明らかである。「就職」に関しては学位と進路に関わりがあると感じているものはほぼ同数，また学位取得後転職したものは表10にもあるように母数が３名と小さいため，ここでは集計結果を表示するにとどめる。さらに，この結果を進路別に，取得した学位の専攻分野ごとに分類した結果を表12－１・２・３として示した。

表12－１　就職と学位取得

	関係がある	関係はない	どちらともいえない	無回答	計
文学			1		1
教育学	1				1
社会学					
教養					
学芸					
社会科学					
法学					
経済学					
商学	2	3	1		6
経営学					
理学				1	1
看護学	2	15	8	1	26
保健衛生学					
栄養学	1	1			2
工学	49	20	18	1	88
家政学					
芸術学	9	26	22	2	59
計	64	65	50	5	184

表12－２　転職と学位取得

	関係がある	関係はない	どちらともいえない	無回答	計
文学					
教育学					
社会学					
教養					
学芸					
社会科学					
法学					
経済学					
商学					
経営学					
理学					
看護学		1			1
保健衛生学			1		1
栄養学					
工学	1				1
家政学					
芸術学					
計	1	1	1		3

表12－3　進学と学位取得

	関係がある	関係はない	どちらともいえない	無　回　答	計
文　　学		1			1
教育学					
社会学					
教　　養	1				1
学　　芸					
社会科学					
法　　学			1		1
経済学					
商　　学					
経営学					
理　　学					
看護学	1				1
保健衛生学	4				4
栄養学					
工　　学	31		1		32
家政学					
芸術学	9	8	8	1	26
計	46	9	10	1	66

5　学位を取得したことの感想

問5では，学士の学位を得たことに対する授与者の感想を，満足度を軸にたずねた。その結果が表13である。

表13　学位取得の感想

満足度	回答数	比　率
大変満足	235	61.8%
まあ満足	125	32.8
どちらともいえない	17	4.4
やや不満	1	0.3
かなり不満	1	0.3
無回答	1	0.3
計	380	

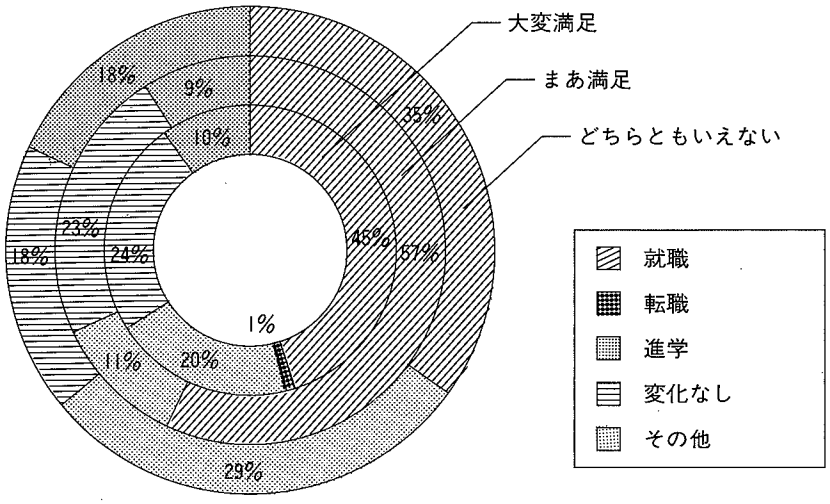
上記の表にも見られるように，「大変満足」と回答したものが全体の61.8パーセント，「まあ満足」としたものが32.8パーセントで，全体の約94.7パーセントにあたる360名が，程度の差こそあれ学士の学位を得たことに満足感をもっていることが窺える。

では，この学位取得後の感想と学位取得後の進路には何らかの関係が見いだせるだろうか。次に掲げる図12－1・2は，それぞれ進路の満足度別構成と，分析軸を逆にした満足度の進路別構成である。

ここで注目すべきなのは，図12－2の進路「進学」において，学位取得の感想を「大変満足」とする回答が71パーセントと，とくに高率を示している点であろう。この満足度の高さには，項目4－2で述べたように進学と学位取得が高い関連性をもっていることが反映されていると考えられる。

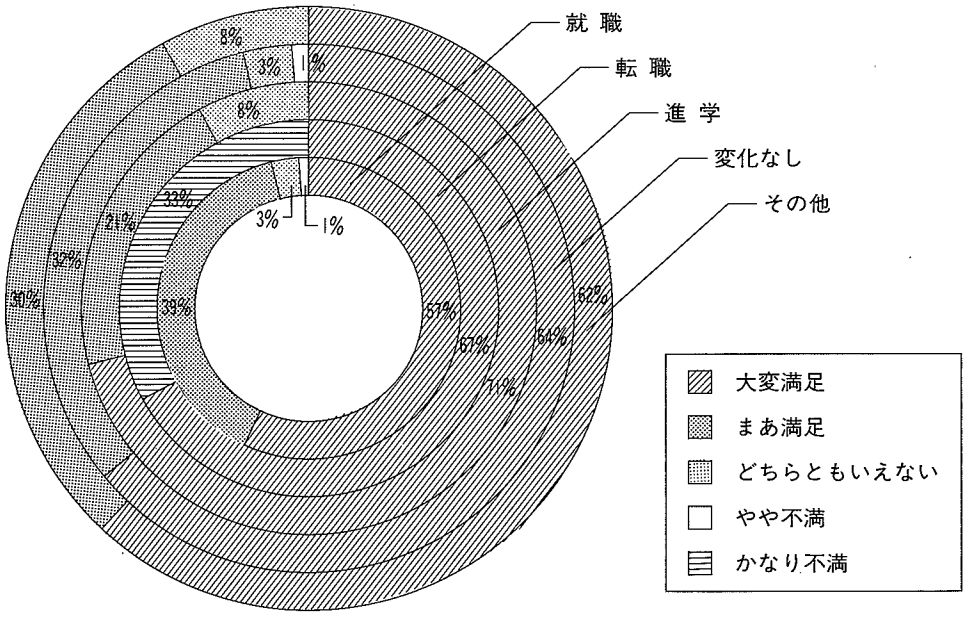
ただし，この点をのぞけば，満足度別進路の統計，進路別満足度の統計双方において目立った特徴は見られない。

図12－1　学位取得の感想（満足度別進路）



その他の回答（カッコ内は進路）…やや不満（就職）1名，かなり不満（転職）1名，無回答（変化なし）1名

図12－2　学位取得の感想（進路別満足度）



6　学位取得・学位授与制度への感想

アンケートでは5－2として学位取得の具体的な感想，また6として学位授与制度そのものへの意見を問うている。アンケートのなかではこれらの2項目だけが記述式で，その回答の内容は両項

目にわたって相い似たものになっている。したがってここでは５－２，６の２項目をまとめて扱うことにする。

前項でもふれたように，学士を取得したことに対する回答者の満足度の高さを反映して，ここでの記述もおおむねポジティブなものが多く見受けられる。本論の２の項目に示したように，学位取得の動機を「自分に有益と思ったから・生涯学習の一環として」と回答したものが半数近くを占めたが，それに呼応するように，学位取得により「自信がもてた」とするものも多い。たとえば「昼夜研究に励み，合格することができとてもうれしい。今後は大学卒（学士…引用者註）としての自覚と誇りを持ち，勉学・勤務に努力しようと思う」（看護学），「自分自身の自信につながったと思う」（美術），「これで大卒の友達に引け目を感じずに，対等につき合えると思う」（土木工学）などの感想が散見される（カッコ内は学士の申請の専攻区分）。また「専攻科との両立で放送大学に通い，レポートを完成させることは大変だった」（看護学），「夜勤の前後に大学に通い単位を取ることは大変だった」（看護学）という意見からも，苦労して取得した学位であるための満足度の高さが推察される。さらには「一般の（４年制…引用者註）大学では学部卒で無条件に学位が与えられるのに高専専攻科卒業者は学位授与機構の審査を受けねばならない。（学力においては同等かそれ以上であると自負するので）差別感を感じる」（情報工学）という高専見込み申請者の意見もあった。これは４年制大学も一定の条件を満たさなければ卒業できないという現実とは相容れない意見であるが，申請のための単位を積み上げ，学修成果を完成させるまでに払われた労力の大きさを窺わせる。また，基礎資格該当後に積み上げるべき単位のうち16単位以上を大学で得るように定められている条項に対する疑問も何件か提示されているが，これはほとんど高等専門学校専攻科の見込み申請者からの意見であった。

申請時に提出した学習成果に関しても，「論文の評価を得たい」（商学）などの意見が寄せられている。あるいは音楽の学位取得者からは「面接時にアドバイスをしてくれた面接官の名前が知りたい」という意見も得られている。

また，申請から授与までの手続きに関しても，「試験会場を増やしてほしい」（応用化学）という意見も多く見られた。現在学位授与機構の試験は年に２回東京会場と大阪会場の２会場で行われているが，面接試験は全国１会場という状況もあり，専攻の区分が美術であって当日会場に作品を搬入する必要のあった授与者からはこのような回答が多く寄せられている。また，大学院受験の申請とのかねあいで合否の判定の通知を早めてほしいとの意見も出されている。

さらに職業・進学等，学位取得の社会的な影響については，「就職したが，４年制大学卒業者と同じ待遇を受けている」（美術），「給与は４年制大学卒として扱われている」（看護）「大学院への進学や研究生としての入学の可能性ができた」（検査技術），「大学院に進学した」（機械工学）などの報告が散見される反面，「学位授与制度がよく知られていないため，就職先では大卒と同じ待遇は受られずにいる」（電気電子工学），「学位授与機構の存在を知らない企業が多く，就職時に短大卒として扱われた」（商学）という報告も多く見られる。

おわりに

以上，平成6年10月期までに学士の学位を申請し，審査の結果学位を授与された者へのアンケート調査の結果を，解説を交えながら紹介してきた。この結果からは，学位の申請者，授与者ともに短大・高専の見込み申請者が大きな比率を占めており，したがって学位授与機構の学士の制度は出身校で知ったというものが大半であることが改めて明らかになった。また見込み申請者以外の申請者については保健医療関係の職業に就いている者からの申請の割合がとりわけ高いことも示された。学士修得後の進路は就職したものが約半数を占めるが，取得した学位との関係は進学した者においてより強く認識されている。また授与者は学位を得たことにおおむね満足しているが，本制度の社会における知識等，学位授与機構自体の周知活動の必要性を示唆する内容ともなっている。

なおこの調査と単純集計は学位授与機構管理部学務課が担当し，それ以外の集計・分析は森が担当したが，本論の文責は森に帰するものである。

今後学士の学位申請者は増加することが予想されており，またこの追跡調査も引き続き実施される。集計結果は本紀要においても順次報告する予定である。

〔資料〕

アンケート

1．これから質問させていただくことがらのそれぞれついて，あなた自身にあてはまると思われる項目の番号と同じ（回答票）の番号を○で囲んでください。
2．「その他」や「(具体的にわかれば：　　)」等については番号の後の（　）に記入してください。
3．記述回答についても（回答票）の所定欄になんなりとご自由にお書きください。
4．終わりましたら（回答票）だけをご返送ください。

問1　学位授与機構による学士の学位授与制度を，どこで知りましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。

1　出身（在籍）の学校で
2　新聞・雑誌等で（具体的にわかれば：　　）
3　テレビ・ラジオ等で（具体的にわかれば：　　）
4　友人・知人から聞いた
5　その他（具体的に：　　）

問2-1　学士の学位を取得しようとした動機は，次のどれですか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。

1　自分に有益と思われたから（生涯学習の一環として）
2　自分の仕事にとって有益と思われたから
3　就職や転職に有益と思われたから
4　進学するために必要であったから
5　資格等の取得のために必要であったから（資格等の名称：　　）
6　その他（具体的に：　　）

問2-2　特に強い理由を一つ選ぶとしたらそのうちどれですか。（　　）

問3　学士の学位授与の申請をされた時の職業は，次のどれですか。

1　会社員・銀行員等（企業，団体等に勤務する方）
2　公務員（公務員で教員である方を除く）
3　教　員（教職に従事する方）
4　保健・医療関係
5　自営業（商店等個人で営む方）
6　農業等（農業，林業，漁業等に従事する方）
7　家庭の主婦
8　学　生
　1 短期大学専攻科の学生
　2 高等専門学校専攻科の学生
　3 大学院の学生
　4 上記以外の学校等の学生（具体的に：　　）
9　その他（パート・アルバイト，職業を持たない方　等）

問4　学士の学位取得後の進路は，次のどれですか。

1　就職した
2　転職した
3　進学した
→ 学位の取得に関わりが
1　あ　る
2　な　い
3　どちらともいえない

4　取得前と変わらない
5　その他（具体的に：　　）

問5-1　学士の学位を取得したことについてあなた自身どのような感想をお持ちですか。

1　大変満足している
2　まあ満足している
3　どちらともいえない
4　やや不満である
5　かなり不満である

問5-2　何か具体的に感想がありましたら回答票の所定欄にご記入ください。

問6　学位授与機構の行っている学位授与制度等について，どんなことでも結構ですので，回答票の所定欄にご記入ください。

（取得した学位が役立っているか，学位を取得したことの効果，など）

事務上の参考として当機構の印刷物についてお尋ねします。

参考1　「新しい学士への途」の中の単位取得方法等の説明文は分かりやすいものでしたか。

1　分かりにくかった
2　やや分かりにくかった
→ 分かりにくかった点を具体的に回答票の所定欄にご記入ください。
3　分かりやすかった
4　とても分かりやすかった

参考2　「学位授与申請書類等」の中の記入方法は分かりやすいものでしたか。

1　分かりにくかった
2　やや分かりにくかった
→ 分かりにくかった点を具体的に回答票の所定欄にご記入ください。
3　分かりやすかった
4　とても分かりやすかった

以上で質問はおわりです。お忙しいところアンケートにご協力いただきましてありがとうございました。なお、（回答票）だけをご返送ください。

〔ABSTRACT〕

A Follow up Survey on the NIAD Bachelors

Rie Mori*

National Institution for Academic Degrees (NIAD) has awarded degrees based on section 3 of article 68-2 of the School Education Law. There are several schemes to obtain a NIAD degree. One way to obtain a Bachelor's degree is to accumulate plenty of credits in proper fields of study. This type of Bachelor's degrees of NIAD have been awarded to 594 people in all out of 727 applicants up to Autumn of 1995. Those applicants were demanded to accumulate proper amount of credits in educational institutions other than universities e.g. advanced programs of junior colleges or colleges of technology recognized by NIAD, otherwise in universities as non-matriculated and credit-based students. They also asked to display their scholarship in an academic discipline out of 26 categories on NIAD Bachelor's Degree.

NIAD has made inquires to the successful applicants by sending them out questionnaires. This is a series of simple inquiries to contribute both to further research in degrees and improvement of the system in NIAD, and to prepare for a coming comprehensive research and analysis on NIAD bachelors.

This article is a summary of the inquiries up to 1994. Until then, 380 people have responded to the inquiries out of 482 successful applicants by sending back sheets of questionnaire which contains 6 kinds of questions as shown below;

1 How were you informed the degree awarding system of NIAD? (Multiple choice)

2-1 What were your motivations to obtain a bachelor's degree? (Multiple choice)

2-2 Which was the strongest motivation out of 2-1? (Choice)

3 What was your job when you were awarded a bachelor's degree? (Choice)

4 How did your life come to be after receiving a degree? (Choice)

5-1 How satisfied are you with receiving a degree? (Choice)

5-2 If any, please describe how you feel about receiving a degree. (Description)

6 Please describe anything you feel of the degree awarding system of NIAD itself (such as if the degree is effective or not). (Description)

---

*Research Fellow, National Institution for Academic Degrees

According to the analysis of the questionnaire, two thirds of the 380 were in the advanced programs of junior colleges or colleges of technology. They were allowed to make an application to NIAD in October in the last academic year of their own programs as expected applicants, i.e. to be expected to complete the program at the end of the academic year. Eventually, more than 90% of all got information on this degree system at their schools or Alma Mater. About 76% of non-expected applicants had their own jobs and 61% of them were medical professions.

After receiving a bachelor's degree, about 48% were recruited for the first time in their life, 0.8% of them had changed their occupation, and about 24% entered schools of higher grade and attribute their choice, since obtaining degrees, compared to the above mentioned groups. Most of all the successful applicants were satisfied with their degrees, however, this new type of bachelor's degree must be known to everybody to guarantee the ability and credence. Therefore, public relation activities would be one of the emergent tasks of NIAD's.